論文の内容の要旨

論 文 題 目　Julius Caesar Scaliger, Reformer of Renaissance Aristotelianism: A Study of *Exotericae Exercitationes*（ルネサンスアリストテレス主義の改革者ユリウス・カエサル・スカリゲル：『顕教的演習』の研究）

氏名　坂本邦暢

本論文はユリウス・カエサル・スカリゲル（Julius Caesar Scaliger, 1484–1558）の『顕教的演習 Exotericae Exercitationes』（パリ、1557 年）を研究するものである。スカリゲルは 1484 年にイタリアのパドヴァで生まれ、南仏のアジャンで活動した医師にして人文主義者、そして何よりもアリストテレス主義を奉じる哲学者であった。彼の哲学的主著である『演習』は出版後約 100 年にわたり自然哲学と形而上学の教科書として広く読まれ、『演習』を読んでいなければ哲学者でないと言われるほどの人気を博した。ヨハネス・ケプラー、ガリレオ・ガリレイ、ロバート・ボイルといった新哲学・科学の提唱者たちも『演習』を注意深く読んでいたことが、彼らの著作や残されたノートからうかがえる。しかし 17 世紀後半以降、『演習』は急速に評価を落とし、忘れ去れられていった。再び関心が高まったのはようやく 20 世紀にはいってからのことである。とりわけ近年の科学史研究者たちは、17 世紀に粒子論・原子論が構想されたときの着想源の一つとしてスカリゲルの著作を取り上げるにいたっている。こうして長きにわたる忘却を経て、『演習』はいわゆる科学革命期のヒストリオグラフィのなかで逸することのできない位置を占めることになった。

しかし今なお『演習』の理解は不十分な水準にあると思われる。科学史研究者のものを含めこれまでの研究は単一のトピックに焦点を絞って『演習』にアプローチしてきた。結果として理解は断片的となり、同書の全体がいかなる企図のもとに構想されているかが明らかとなっていない。『演習』で表明されている哲学の基本的特徴が把握されていないことは、この著作の歴史的理解を妨げてきた。たとえば『演習』のアリストテレス主義は、ルネサンス期のアリストテレス主義の歴史のなかでいかなる位置を占めるのか。その形成に若きスカリゲルが身を置いていたパドヴァ大学の教育環境はいかに寄与したのか。最後に彼の哲学が新哲学・科学の提唱者を含めて多くの知識人たちにとって着想の源泉になったことを、その思想の特質に即してどう説明できるのか。これらの問いに『演習』の分析の上に立って答えることで、同書を 16 世紀から 17 世紀にかけての哲学史・科学史のうちに位置づけることが本論文の目的である。

まず創造と三位一体という主題についてスカリゲルが『演習』で述べていることを検討することで、彼のアリストテレス主義が当時復興をとげていたプラトン主義に対抗する形で形成されていたことを論じた。キリスト教の教義と親和的なプラトンの哲学とは対照的に、アリストテレスは創造と三位一体の教義に反する教えを支持している。このようなプラトン主義者の主張に対し、スカリゲルはアリストテレスの著作からは彼が創世を行った三一なる神の観念を有していたことが分かると反論した（1 章）。

神の被造物である世界で諸々の現象がどのようにして生じているかを説明する際にも、スカリゲルはアリストテレスへの挑戦に直面した。スカリゲルの同時代人であり、『演習』における主たる論敵であったジロラモ・カルダーノ（Girolamo Cardano, 1501–76）はあらゆる現象の原因として万物に行き渡る熱を想定し、これを「世界霊魂」と呼んだ。スカリゲルはこの一元論的世界観を批判し、それは経験的事実を説明できず、アリストテレスの哲学と両立しないばかりか、「創世記」の記述とも合致しないと指摘した（2 章）。代わりにスカリゲルが提示したのが多元的な能動原理からなる世界像である。神は一つではなく多様な形相を創造し、それらを階層的に整序することで世界に秩序と一体性をもたらしたというのだ。スカリゲルによれば、これが最善でありそれゆえ必然的な世界のあり方である（3 章）。

多様な形相の活動から世界は成り立つという基本原理から、スカリゲルは多くの問題についての自説を発展させている。たとえば空虚の存在は世界の一体性を損なうものとして否定される。単一の普遍的な形相が数多くある個別の形相を導いて空虚の発生を防いでいるとスカリゲルは考えた（4 章）。スカリゲルは同種の調整者としての役割を天界では第一知性に与えた。第一知性は下位の諸知性すべてが模倣する対象であり、模倣されることにより下位の知性が統一的な天球の運行を引き起こすことを可能にしてい

る。互いに独立した複数の能動原理がいかに世界に秩序をもたらすかを語っている点で、ここでもスカリゲルは自らの世界観に忠実に理論を組み上げているといえる（5 章）。

生成と混合についてのスカリゲルの理論は、彼が形相の概念を多元的世界像にそって精緻化していたことを示している。霊魂を四元素に還元する学説を強く否定しながら、スカリゲルは霊魂のみならず形相一般もまた非物質的な第五精髄であり、それゆえ不死であると結論づけた。月下界で生じるあらゆる活動はすべてこのような形相が引き起こす。他の能動原理は必要ない。よってスカリゲルは伝統的な形成力の観念をしりぞける。形成力は霊魂（ゆえに形相）とは独立に生物の体を形成すると考えられていたからである。スカリゲルによれば体の形成を行うのは「自らの家の建築家」である霊魂である（6 章）。形相が消滅しないという観念から、スカリゲルは複合的な実体を構成する各部位の形相が実体中で保存されていると考えるにいたった。しかしある実体のうちに複数の形相を認めることは、その実体の単一性を否定することになりはしないか。スカリゲルはこの疑問を、実体中では下位の形相が上位の形相のもとで可能態として存続していると考えることで解消した。実体の単一性を保証しているのは、唯一現実態にある最上位の形相である。したがって（四元素の形相をのぞく）あらゆる形相は、下位の形相の混合からなり、それらは上位の形相の支配のもとで階層的な構造をなしているととらえられる（7 章）。

以上から『演習』に現れている哲学の基本的特徴を次のように要約できる。神は世界のはじめに非物質的な形相を数多く創造した。それらは階層構造的に整序され、その活動の総体が秩序と統一性を世界にもたらしている。このような特徴を有するアリストテレス主義に歴史的な位置づけを与えるためには、若きスカリゲルが学んでいた 16 世紀初頭のパドヴァ大学の状況に目を向けねばならない。当時パドヴァをはじめとするイタリアの諸大学では哲学を神学から切り離す世俗的で自然主義的なアリストテレス主義が台頭しており、知性の単一性を唱えるアヴェロエスの学説や霊魂を四元素に還元するアフロディシアスのアレクサンドロスの学説がしばしば正しいアリストテレス解釈として支持を集めていた。スカリゲルは世俗的傾向を持つ教師たちに教育を受けながらも、アリストテレス哲学とキリスト教の教義との両立を重んじるスコトゥス主義のグループと交友を深めていた。そのため彼はアヴェロエスやアレクサンドロスの学説に現れている一元的で物質主義的なアリストテレス解釈への反発に覚えるにいたった。そこですべての能動原理を熱に一元化するカルダーノの哲学に反論する形で、スカリゲルは『演習』において多元的で非物質的な形相をその基礎に置くアリストテレス主義を定式化したのである（8 章）。

以上のようなスカリゲルの哲学の検討は、ルネサンスのアリストテレス主義への新た

な視角をもたらす。従来の研究はパドヴァで発展した自然主義的アリストテレス主義解釈と、その後世における受容に着目してきた。これに対して本研究は、パドヴァ大学の環境がスカリゲルの『演習』に現れているような自然主義への強い反発もまたはぐくんでいたことを明らかにした。そこで定式化された物質には還元できない多様な形相というスカリゲルの観念は、17 世紀にアルプス以北で台頭した新しい哲学に取り込まれることになる。とりわけ厳密な機械論的説明が有効に機能しないと考えられた化学と生物学の領域で、スカリゲルの形相概念は重要な着想源となった。こうしてイタリアで形成されフランスから発信されたスカリゲルのアリストテレス主義は、新しい自然哲学の構想にあたって不可欠となるような理論的基礎を北方の哲学者たちに提供することになったのである（結論）。

付録として生成と混合に関するスカリゲルの議論の英語訳を収録した。